

# 中 1 不登校の

# 未然防止

... 「7つの視点」に立った小・中連携 ...



小学校・中学校ともに手を取り合って

モデルプラン

宮城県教育研修センター

## はじめに

不登校問題がクローズアップされてから久しい今日ですが、本県においても、未だ不登校発生率は1.15%前後での横ばい状態が続いており、大きな課題であると言えます。特に、中学進学と共に不登校数が約3倍に急増する現象は、中1ギャップと呼ばれることもあり、子供たちにとって大きな環境の変化を、教師がなだらかにしてやったり、乗り越える力をはぐくんだりしていく必要があります。そのために重要になってくるのは、小・中の連携です。

本書は、各校が独自の不登校未然防止を踏まえた指導計画の作成をするに当たり、不登校数が0に限りなく近づくこと（これまで不登校がない学校にとっては、今後も発生しないこと）をねらい、その参考とするため作成しました。小学6年生や中学1年生の学校生活に関する不安や悩みの解消を小・中が連携して行い、本来抱いている期待や希望を膨らませていくための取組のポイントを示しました。

また、現在の学校教育上の課題は、いじめ問題、校内暴力、非行等、不登校に限ったことではありません。本モデルプランは、表題にある通り、「中1不登校の未然防止」をねらったものではありませんが、本プランに基づいた取組をしていくことが中1不登校を未然に防止するばかりでなく、広く生徒指導上の諸問題の発生を防止していくことにつながると考えています。

平成19年3月

宮城県教育研修センター

平成18年度 教育相談研究グループ

## 目 次

はじめに.....	1
目次.....	2
1 中1不登校の現状と「7つの視点」に立った小・中連携の必要性.....	3
2 「7つの視点」に立った小・中連携の構想図.....	4
3 モデルプラン.....	4
・ モデルプランチェック表.....	5
1) 聞き取り調査より.....	6
対策1 不安・悩みの把握.....	7～11
対策2 チームで対応 .....	12～16
対策3 中学校へのなだらかな移行 .....	17～22
2) 本研究が提言する5つの取組.....	23
(1) 年間計画・取組のポイント .....	24～26
(2) 指導計画 .....	27～36
4 資料編 .....	37～54

# 1 中1不登校の現状と「7つの視点」に立った小・中連携の必要性

## ご存知ですか...

不登校児童生徒数は、小学1年生から中学3年生までの間、学年が上がるにつれて増加しています。全国的に見ると、小学6年生から中学1年生の間の増加は3倍以上であり、これは本県においても同様

です(図1)。小学校から中学校への進学は、いわゆる中1ギャップと言われるように、新しい教科や定期テスト、教科担任制などの学習環境の変化、他の小学校出身者との新たな出会いや成長に伴う友人関係の変化、部活動への参加やその中での人間関係の構築など、教育環境が大きく変化します。そのために過大な不安を抱いてしまったり、うまく適応することができなかつたりする

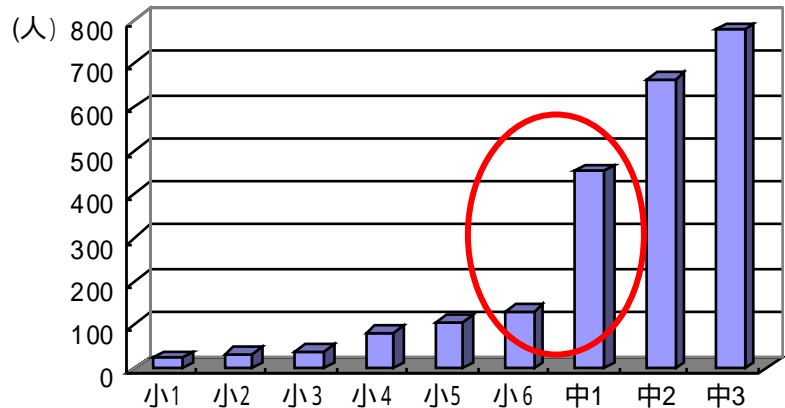


図1 不登校児童生徒の学年別数(平成17年度 宮城県)

場合があります。中学校においては、その後も高い増加率を示しており、高校での不登校や退学問題とも関連し、中学1年での不登校の急増を防ぐことは、重要な問題であると言えます。

この問題を解決するためには、小・中連携が大切です。本研究が考える小・中連携とは、次の3点です。

- 1 小学校が責任をもって進める取組
- 2 中学校が責任をもって進める取組
- 3 小・中が合同で進める取組

これら3点を、同じ進学区の小・中学校が話し合い、十分に共通理解した上で責任を果たしていくことが、本研究が推し進める小・中連携です。

## 7つの視点に立った小・中連携を...

日頃から、「人間関係づくり(視点1)」「学力の保障(視点2)」を中心に進めながら、「保護者との連携(視点6)」を密にし、子供たちの成長をはぐくみます。その際、「スクールカウンセラー(以下SC)との連携(視点7)」を行い問題の早期発見、早期対応に努めることも大切です。小学校高学年になったら、中学進学を想定し、小・中連携をより一層強化していきます。その際、「小学6年生への進学情報の提供(視点3)」「小・中教員の相互理解(視点4)」「児童生徒についての情報の共有(視点5)」の視点から取組を計画し、

- |     |                |
|-----|----------------|
| 視点1 | 人間関係づくり        |
| 視点2 | 学力の保障          |
| 視点3 | 小学6年生への進学情報の提供 |
| 視点4 | 小・中教員の相互理解     |
| 視点5 | 児童生徒についての情報の共有 |
| 視点6 | 保護者との連携        |
| 視点7 | スクールカウンセラーとの連携 |

確実にねらいを達成していくことで、小・中連携の成果が最大限に上がることでしょう。こうした小・中連携を進めていくことにより、中1ギャップの解消につながり、中1不登校の未然防止ができると考えられます。

## 2 「7つの視点」に立った小・中連携の構想図

本県の聞き取り調査において、各校では視点1「人間関係づくり」視点2「学力の保障」視点6「保護者との連携」は日常的に行うことが重要であるという意識で取り組んでいることが明らかとなりました。また、視点3「小学6年生への進学情報の提供」視点4「小・中教員の相互理解」視点5「児童生徒についての情報の共有」視点7「SCとの連携」に関しては、適切と思われる時期に、計画的に実施していくことが大切であることが分かりました。

以上から、不登校未然防止の基盤として日常の教育活動全般における取組として視点1、2、6と、直接働き掛ける取組として視点3、4、5、7(対策1～3)に分けてとらえることができます(図2)。

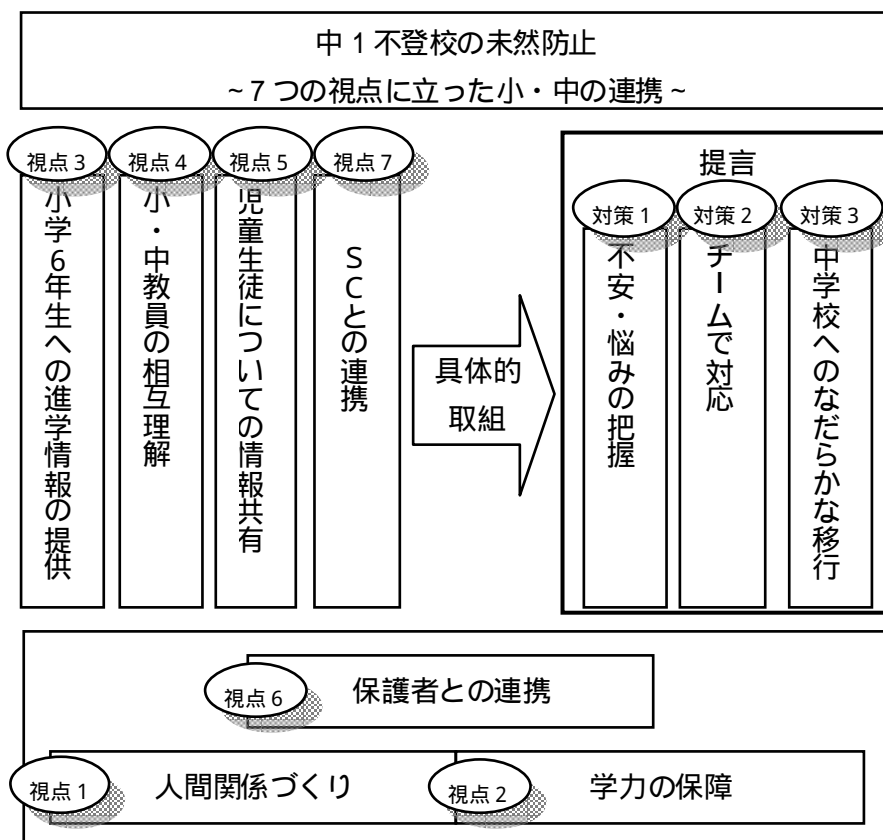


図2 【「7つの視点」の構想図】

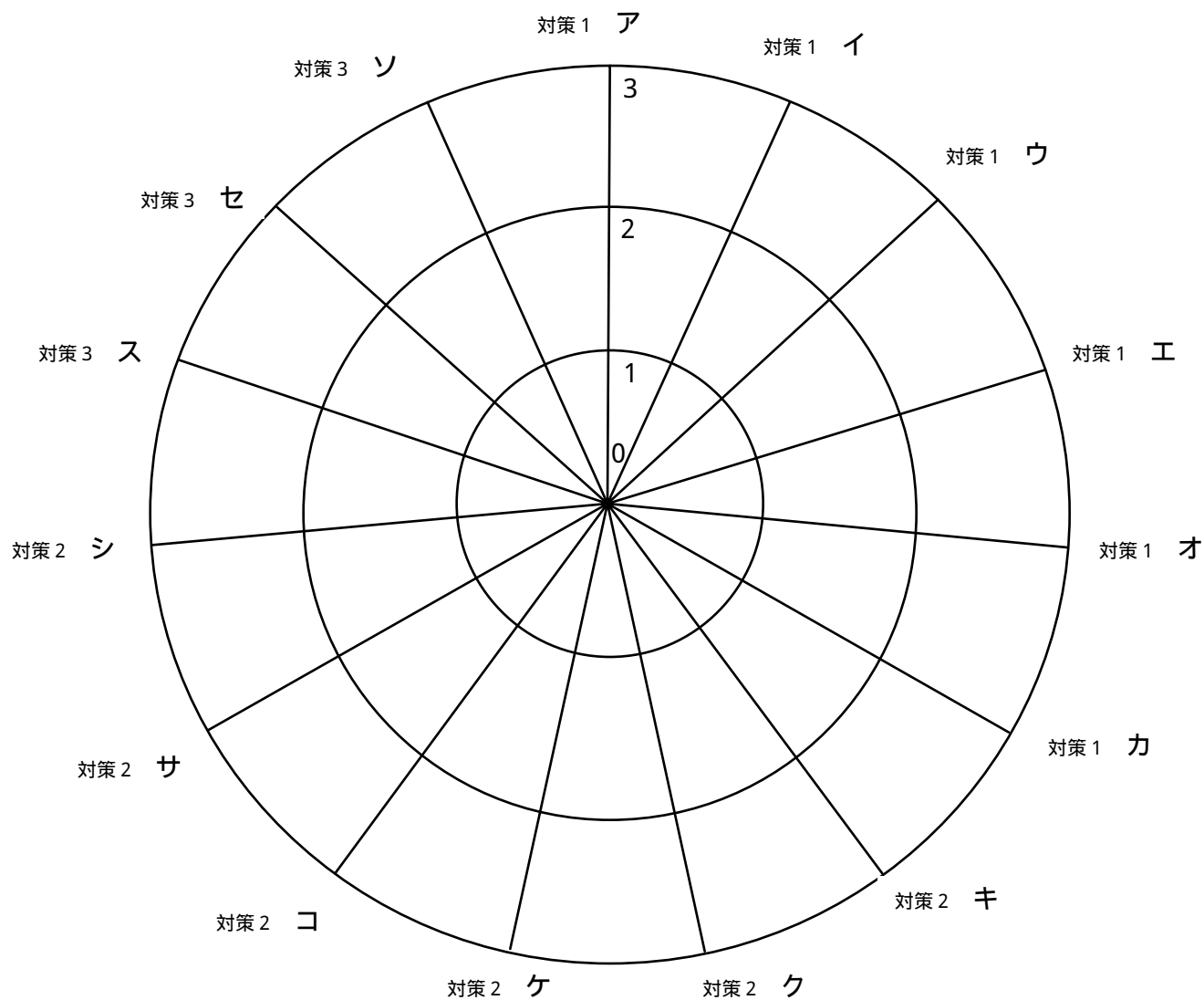
## 3 モデルプラン ……モデルプランチェック表の活用……

各校において本提言を積極的に教育活動に取り入れ、各校の独自性を重視しながら小・中が連携していく際に参考となる指導計画をモデルプランとして以下のようにまとめました。

本調査の結果明らかとなった「7つの視点」に立った小・中連携を進めていくための手だて対策1～3をバランスよく実施しているかどうか診断するために、レーダーチャートに表しチェックする表を作成しました(次ページ)。本チェック表では、取組の有無を15項目でチェックすると共に、本調査の結果から教員の共通理解を重視し、0～3の度合いでチェックをすることができます。本チェック表で、自校の取組を振り返ることにより、不足している部分を明らかにし、追加計画し実施していくことができるものと考えます。

# モデルプランチェック表

..... 小・中連携の度合いが測れる! .....



評価基準	3 : 校内全体で共通理解の下, 取り組んでいる。 2 : 共通理解は不十分だが, 校内全体で取り組んでいる。 1 : 取り組んでいる学級がある。 0 : 取り組んでいない。	3 : 小・中が話し合い, 共通理解の下, 取り組んでいる。 2 : 話し合いの機会はないが, 小・中が文書による共通理解の下, 取り組んでいる。 1 : 小・中共通理解の機会はないが, それぞれの学校に委ねられた計画で取り組んでいる。 0 : 取り組んでいない。		
対策1 不安・悩みの把握		対策2 チームで対応	対策3 中学校へのなだらかな移行	
記述による悩みの把握	個別の話し合い	小・中引継ぎ	小・中学校授業参観	中学校見学体験会
ア 日頃から, ノート等に不安や悩みを記述させる	エ 「受容」「支持」(P29)を中心とした面談	キ 「遅刻, 早退状況」を加えた引継ぎ	コ 授業を参観する際の観点の明確化	ス 中学生の先輩による中学校生活に関する話
イ アに教師からのコメントを加える	オ 「尊重」「傾聴」「共感」の姿勢(P29)での家庭訪問	ク 個人記録を活用した指導の引継ぎ	サ 授業後の検討会における, 気になる児童生徒の情報交換	セ 授業・部活動の見学・体験
ウ アと日頃の児童生徒の観察から行う「様子チェック表(P38)」の活用	カ 事前にアンケートを行い, 面談や家庭訪問に活用	ケ 新学期開始後の柔軟な小・中の情報交換	シ 小・中の相互理解に向けた, 小・中双方での実施	ソ 小学生からの質問コーナー

## 1) 聞き取り調査より

本研究では、県内全小・中学校（仙台市を除く）に対して、「中1不登校の未然防止の在り方」に関する意識・実態調査を行いました。その際、平成16～17年度にかけて「不登校がない」「不登校数が減少している」等、不登校問題を克服してきている学校から、不登校の未然防止に効果的であったと思われる取組について、自由記述の形で回答を得ることができました。それらの中から、詳しく聞き取り調査した内容を「宮城の取組」として紹介します。

	聞き取った取組	P
対策1 不安・悩みの把握	管理職等による全児童対象の面談	7
	心のノート「架け橋」	8
	いじめ早期発見のチェックリスト	9
	いじめアンケート	10
	悩みアンケート	11
対策2 チームで対応	スモールステップでの対応	12
	SCのアセスメント	13
	子育て支援情報連絡会の活用	14
	学力向上に向けた小・中の連携	15
	不登校対応マニュアルの活用	16
対策3 中学校への なだらかな移行	中学入学後の小・中学校での情報交換	17
	交換授業・一部教科担任制のシステムの構築	18
	夏休み中学校体験入学	19
	中学3年生による学校説明会・中学校授業体験	20
	小・中一貫した教育活動の展開・学力の向上	21
	進学先の教師による英語の授業	22

対策1

不安・悩みの把握

対策2

チームで対応

対策3

中学校へのなだらかな移行

# < 管理職等による全児童対象の面談 >

U小学校

[ねらい]

管理職等，担任以外の教師による面談を通して，児童の思いや悩みを把握し全職員での児童理解に努め，その後の指導に生かす。

[実施時期]

6月

[活動内容]

- 1 面談担当者は，校長・教頭・教務主任・養護教諭とする。
- 2 事前に日程表を作成し，実施期間を1ヶ月とする。
- 3 相談しやすい雰囲気づくりに努める。
- 4 聞き取った内容を，担任と情報交換すると共に，全職員での共通理解を図る。

対策1

不安・悩みの把握

担任以外の教師による全校児童への面談は，今年で3年目になります。かつては，教務主任が一人で行っていましたが，しかし，年度末反省会で，もっと多くの教師で，子供達の思いや悩みを把握していく必要があるのではないかという意見が出て，今日のような形で面談を実施しています。気を付けていることは，子供達が話しやすくする雰囲気づくりです。学年の発達段階に応じて，トランプを活用する等，遊びを取り入れることを通して，子供が心を開いて話せるように努めています。

### 【遊びを通じた面談】

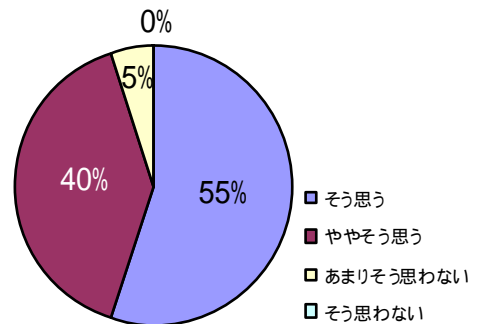
- ・ 遊びを通して，話のきっかけを見つける。
- ・ 子供の行動や言動を基に，話を広げていく。



## [ 宮城の意識・実態調査より ]

Q．多くの教師が不登校傾向にある該当児童生徒と触れ合いを多くするなどして学校全体で指導に当たってきたことが不登校の未然防止に効果的だったと思いますか？

「そう思う」「ややそう思う」を含めて 95%となり，多くの教師で対応することが重要であると考えていることが分かりました。



【教職員全体での指導の重要性】( H18 . 本研究調査 )

## &lt;心のノート「架け橋」&gt;

I 中学校

[ねらい]

生徒一人一人の思いや悩みを、日々把握し生徒理解に努めると共に、生徒の人間関係づくりの支援を図る。

[実施時期]

通年

[活動の流れ]

- 1 ノート「架け橋」に、学校での出来事や思ったことを生徒一人一人が書く。
- 2 毎朝、担任に提出する。
- 3 担任は、全員のノートに目を通し、コメントを書き込む。
- 4 ノートの記述から、必要に応じ個人面談を行ったり、家庭に連絡を取り連携して対応に当たったりする。

心のノートは、毎朝提出させています。学級 30 人以上の生徒全員と毎日会話するのは、難しい面があります。そこで、一人一人の生徒の思いや悩みを吸い上げ、支援していきたいと考えました。どんなに忙しくても、教師がコメントを書き込むようにしています。また、生徒の負担にならないよう、短い文章やイラストで表現することも認めています。このノートからの情報を基に、家庭にアドバイスしたこともありました。やはり、生徒との信頼関係を築くことが大切です。そして、日常的に生徒の思いや悩みを受け止め、早急に対応していくことが大切だと思います。



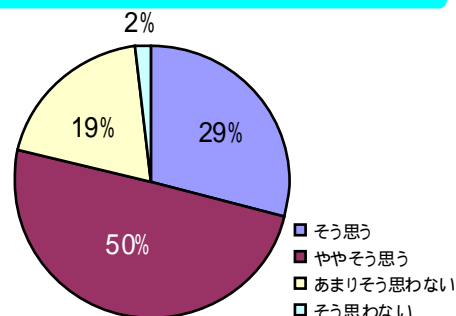
対策 1

不安・悩みの把握

## [ 宮城の意識・実態調査より ]

Q. 児童生徒の不安や悩みを把握するため、日頃から感じている不安や悩みをカードやノート等に記録させてきたことが不登校の未然防止に効果的だったと思いますか？

「そう思う」「ややそう思う」を含めて 79% の教師が不安や悩みをノート等に記録させることが有効であると考えていることが分かりました。



【不安や悩みを記録させる】

( H 18 . 本研究調査 )

## &lt;いじめ早期発見のチェックリスト&gt; P38~39

Q 小学校

[ねらい]

いじめの有無にかかわらず，教師が本チェックリストで児童の様子を定期的に観察することにより，児童が発する心の SOS サインを早期発見し，早期対応に努めるために活用する。

[実施時期]

毎月1回，放課後。

[使用に当たって]

- 1 「いじめ早期発見のチェックリスト1」(資料編「様子チェック表」P38)の10項目に関して，教師がチェックする。
- 2 気になる児童に関しては，さらに「いじめ早期発見のチェックリスト2」(資料編 P39)の47項目で詳細にチェックする。
- 3 2の結果を基に，月に1度の職員会議の際に話題提供し，全職員で共通理解を図る。
- 4 長期休業前には，諸表簿と一緒に提出する。

対策1

不安・悩みの把握

当初は，「いじめ早期発見のチェックリスト 2」の47項目を使って，毎月チェックしていました。しかし，始めてみるとほとんどの児童が各項目に該当することが少なく，学校評価において「能率よくチェックできないものか」という意見が出されたのです。そこで，項目を10項目に絞るという2段階方式を2学期から採用することにしたのです。今では，大変チェックしやすくなったと先生方には好評です。

本チェックリストを使うようになってからは，児童のことを教師それぞれの主観で偏った見方をすることなく観察できるようになったと思います。一人一人に声掛けする内容も変わってきたような気がします。

いじめ早期発見のチェックリスト 1

観 察 項 目	4月	5月
頭痛・腹痛・吐き気を訴えたり，保健室に行ったりする回数が多い。		
活気がなく，表情が暗く周囲を気にする。		
仲のよかったグループから外されたり，どのグループにも入れず，一人でいたりする。		

(資料1)



## &lt;いじめアンケート&gt; P.40~41

J 小学校

[ねらい]

いじめをはじめとする児童の思いや悩みの実態を把握することによって、児童一人一人や学級集団への支援を図る。

[実施時期]

1・2学期，年2回実施

[活動の流れ]

- 1 全職員の共通理解の下，学年部で統一したアンケートを全校で実施する。
- 2 実施後，担任がアンケートを集計し，気になる児童について個人面談を行う。
- 3 必要に応じ，学年部で対応について検討したり，保護者と連絡を取り連携して対応に当たったりする。
- 4 全職員での共通理解を図る。

いじめアンケートは，6月と10月の年2回全校で実施しています。低学年はアンケートの質問内容が分かるように，担任が説明しながら記入するようにしています。いじめの実態や児童が普段感じていること，悩みを把握することが大切なので，無記名でもよいことにしています。児童の友達関係や家庭での様子を知ることができました。自由記述には，多くの児童が記入しており，指導に役立てています。

## 【取組のポイント】

- ・ 児童が思っていることや感じていることの把握を第一に考え，無記名でもよい
- ・ 児童の生の声を吸い上げるため，自由記述欄を設ける

対策1

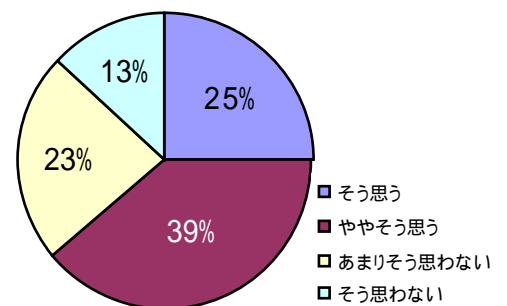
不安・悩みの把握



## [ 宮城の意識・実態調査より ]

Q. 児童生徒間の人間関係がうまくいっていないことが，不登校増加等の要因になっていると思いますか？

「そう思う」「ややそう思う」を含めて64%の教師が，児童生徒の人間関係がうまくいっていないことが不登校増加の要因の一つであると考えています。よりよい人間関係を築くためには，いじめの実態把握は不可欠であると考えられます。



【人間関係について】(H18.本研究調査)

## &lt; 悩みアンケート &gt; P.42

V 小学校

[ねらい]

定期的に悩みアンケートを実施することを通して、児童一人一人の思いや悩みを把握し、それを踏まえ個に応じた支援を行う。

[実施時期]

行事・長期休暇の前後を意識して、2ヶ月に1回の割合で実施

[活動の流れ]

- 1 6年生を対象に、項目ごとに悩んでいることを記入できるアンケートを実施。
- 2 実施後、担任が全員のアンケートに目を通し、記述されていることを基に、一人一人に具体的な支援を行う。
- 3 必要に応じ、他学年の教師と連携を図り指導に当たる。

## 対策1

不安・悩みの把握

児童とのレポートづくりと一人一人の思いや悩みを把握したいと思い実施しています。全員のアンケートに目を通し、記述されたことを基に、児童と面談する等、個に応じた支援を行っています。また、他学年との関わりでの悩みもあり、他学年の先生と連携して指導に当たっています。アンケートを始めた頃に比べると、記述されることが少なくなってきました。それは、アンケートを重ねることによって、児童とのレポートが図られ、普段の学校生活の中で、気軽に悩んでいることを話してくれるようになったからだと思います。今後も、アンケートを活用しながら、ちょっとした児童のサインを見落とさないように努めていきたいと思っています。



## 【アンケート項目】

勉強、運動、健康、自分、友達、先生、家族、自由記述欄

## [ 宮城の意識・実態調査より ]

Q. 生徒：不安や悩みをどのようにして解決しましたか？

教師：不安や悩みをどのようにして解決していると思いますか？

生徒が悩みを解決する際、どのようにしているか教師と生徒に尋ねたところ、「先生に相談する」と回答したのは、教師の場合 73.4%であったのに対して、中学1年生は 18.8%（友達 42.1%、家族 39.8%に次いで3位）でした。積極的に不安や悩みを把握していく手だてを講じていく必要があります。（H17. 本研究調査）

## &lt; スモールステップでの対応 &gt;

R 中学校

[ねらい]

全職員での共通理解の下、学校体制で不登校傾向及び不登校の生徒へ個に応じた支援を行うことを通して、不登校の未然防止と不登校生徒の再登校を目指す。

[実施時期]

通年，必要に応じ随時

[主な対応]

## 【登校に向けたスモールステップの支援例】

バス停等通学途中の場所まで		
校門まで		
昇降口まで		
廊下まで		
	夕方登校	通常登校
別室		
教室		

は，登校目標の難易度

生徒が登校できないような場合，保護者から連絡を入れてもらい，状況に応じて保護者に学校まで送ってもらい，その後学校が対応に当たっています。保護者の協力を得ると共に，学校が保護者の相談に随時応じていくことで，保護者との信頼関係が築かれ，保護者との連携が図られると思います。

教室に入れられない生徒に対しては，教師が生徒の気持ちに寄り添うことに心掛け，心の相談室での学習プリント等を活用した指導を行っています。また，不登校生徒に対しては，人との関わりが大切だと考え，生徒の状況に応じて，放課後，職員室に登校させ多くの教師と触れ合いがもてるようにしています。生徒とラポートをとりながら，一人一人の生徒のニーズに合った進路や学習の指導を行っています。



対策2

チームで対応

## &lt; S C のアセスメント &gt;

T 中学校

[ねらい]

S C との連携を図ることによって、個に応じた生徒への適切な支援に努める。

[実施時期]

S C との打合せ（毎週火曜日）、S C の助言（随時）

[主な活動]

- 1 S C と各学年の教育相談担当、生徒指導主事で打合せを実施。
- 2 打合せでの S C からの助言を、次週の指導に生かす。
- 3 各教員が、個別の生徒への対応について、S C に相談し、専門的な助言をもらい指導に生かす。  
S C との窓口は、生徒指導主事とする。
- 4 S C が「S C の活動への理解、教師との連携」についてガイダンスを実施。

毎週火曜日に、S C との打合せを行っています。各学年から、不登校・不登校傾向の生徒の様子を報告し、S C から助言をもらいます。それを踏まえて、次の週の指導に生かしています。また、打合せ以外にも、各教師が生徒への個別の対応について、S C に相談し助言をもらい指導に生かしています。S C の専門的な助言は、生徒への指導に役立っています。今後も S C との連携を大切にしていきたいと思えます。

## 【取組のポイント】

- ・ S C との定期的な打合せ
- ・ 教師の S C への相談  
生徒の個別支援について

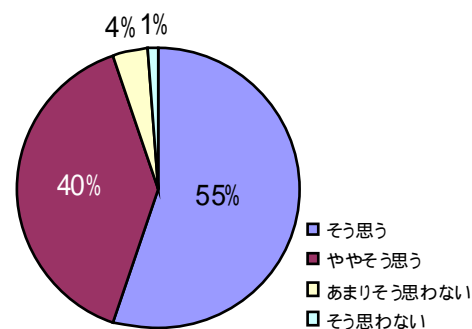


対策 2  
チームで対応

## [ 宮城の意識・実態調査より ]

Q . S C , 心の教室相談員等と連携をして指導に当たってきたことが不登校の未然防止に効果的だったと思いますか？

「そう思う」「ややそう思う」を含めて 95% となり、多くの教師が S C , 心の教室相談員等と連携をして指導に当たっていくことが大切であると考えていることが分かりました。



【 S C 等との連携の重要性】( H18 . 本研究調査 )

## &lt; 子育て支援情報連絡会の活用 &gt;

S 小学校

[ねらい]

行政や関係機関、学校等が、子育てを支援していくことを目的に、情報を共有し支援体制の在り方を検討する「子育て支援情報連絡会」を活用し、学校がこれらの関係機関と連携を図って、不登校傾向及び不登校児童とその保護者への支援に努める。

[実施時期]

スタッフ会議、年2回（ケース会議、随時）

[活動の流れ]

- 1 スタッフ会議で、情報交換をし、支援体制の在り方を検討する。
- 2 ケース会議を随時開き、関係機関と情報交換をすると共に対応を検討する。
- 3 必要に応じ、地域子どもセンター等の関係機関と連携して対応に当たる。
- 4 その後も、関係機関との情報交換を継続して行い、不登校傾向及び不登校児童とその保護者へ支援をしていく。

この連絡会議があることによって、他の機関とのつながりができ、連携して、不登校傾向及び不登校児童とその保護者へ支援していくことができます。学校だけでは、十分な支援を行うことができないことがあり、その場合、専門機関と連携して対応に当たることは、学校としても心強いものがあります。学校から保護者に専門機関への相談を勧めても、なかなか保護者の方から行動してもらえない場合があります。学校、保護者、専門機関が一緒に話し合う場を設定し、その後も、連携を図って支援することによって不登校児童の生活改善に努め、自立をうながしていくことができます。そのためには、日頃から保護者と学校との信頼関係を築くことが大切だと思います。

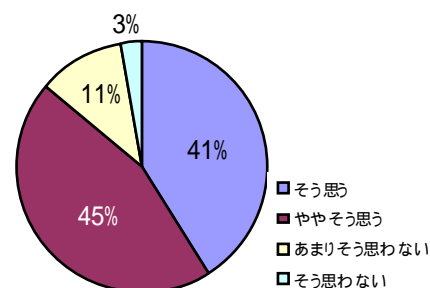


対策2  
チームで対応

## [ 宮城の意識・実態調査より ]

Q. 主任児童委員や民生児童委員と情報交換会を開く等、地域との連携を図ってきたことが不登校の未然防止に効果的だったと思いますか？

「そう思う」「ややそう思う」を含めて 86% となり、多くの教師が地域と連携をして指導に当たっていくことが大切であると考えていることが分かりました。



【地域との連携の重要性】(H18. 本研究調査)

## &lt; 学力向上に向けた小・中の連携 &gt;

L 小学校

[ねらい]

小・中学校教員相互の授業研究や協議を通して、小・中連携での授業改善を目指し学力向上を図る。

[実施頻度]

各校1回ずつ授業見学，授業後の分科会（分科会ごと継続して随時開催）

[主な内容]

- 1 小・中学校での授業見学を行い，授業改善に向けて検討する。
- 2 授業後の分科会（家庭学習・学習カルテ・調査研究）ごとに研究協議する。
- 3 家庭学習の手引きを作成し，家庭学習の指導に生かす。
- 4 家庭学習便りを随時発行し，家庭への協力を呼び掛け家庭学習の習慣化を図る。

小・中が連携して，学力向上の視点に立ち，授業改善や家庭学習の在り方について検討しています。小・中の教員が互いに授業を参観し，分科会ごとに検討することによって，授業改善に努めています。また，家庭学習の指導についても検討しています。小学校から家庭学習の習慣化を図り，中学校でも抵抗なく取り組むことができるよう家庭学習の手引きを作成し指導しています。また，保護者にも家庭学習便りを発行し，家庭学習に関する情報提供や家庭学習への協力を呼び掛けています。

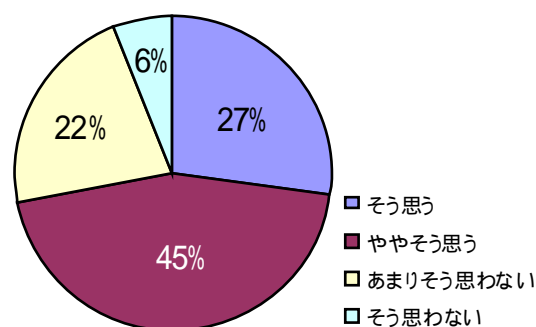


対策2  
チームで対応

## [ 宮城の意識・実態調査より ]

Q．小・中が連携して指導していく上での児童生徒理解と学力向上につなげるため，小・中学校相互に授業を公開し合い，教員が相互に参観してきたことが不登校の未然防止に効果的だったと思いますか？

「そう思う」「ややそう思う」を含めて72%となり，多くの教師が小・中学校相互に授業を公開し合い，教員が相互に参観してきたことが大切であると考えていることが分かりました。



【小・中教員相互の授業参観の必要性】(H18.本研究調査)

< 不登校対応マニュアルの活用 > P.43

W小学校

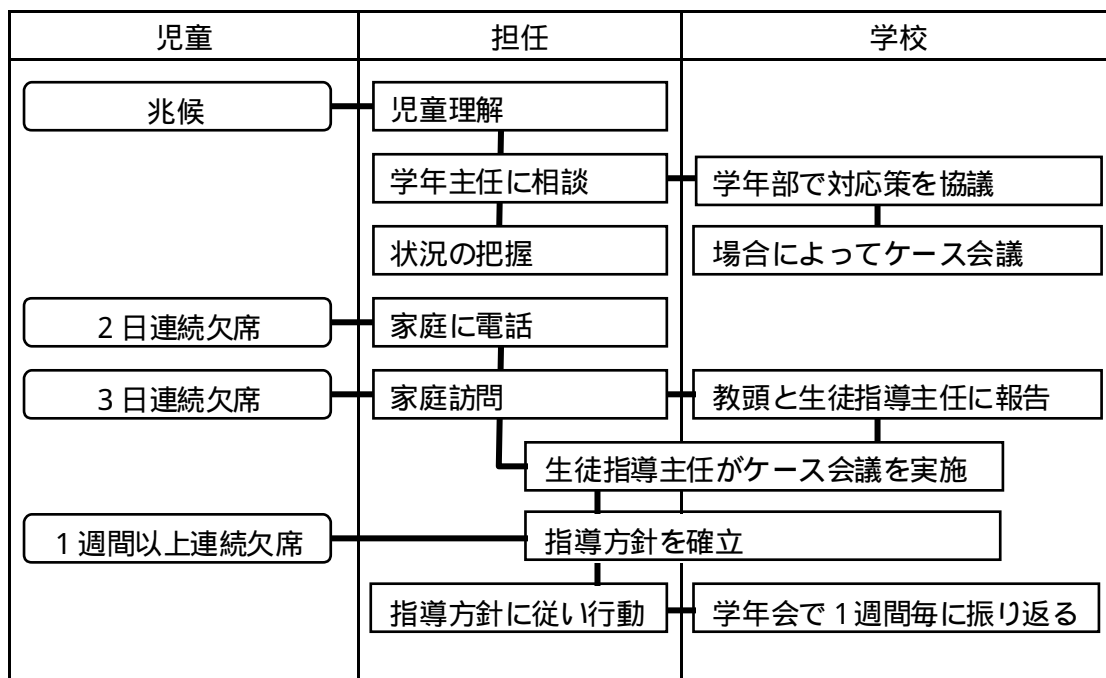
[ねらい]

本マニュアルを基に、不登校傾向児童への対応の仕方に関する共通理解を図ると共に、組織的な指導体制での支援を行う。

[実施時期]

通年，必要に応じ随時

【不登校対応マニュアル】



対策2  
チームで対応

本校では、不登校傾向の児童が多かった時期がありました。その際、担任によって対応が異なり全職員での共通理解が十分なされていない面がありました。その反省を踏まえ、不登校対応マニュアルを作成し、共通理解を図り、それを基に組織的な指導体制で対応に当たっています。例えば、ケース会議を開き、担任、学年主任、養護教諭、生徒指導主任等が対応について検討し指導方針を決めます。必要に応じて、管理職や心の教室相談員も参加します。昨年度から、保健室で学習することを避けサポートルームを設け、教室に入れない児童への支援ルームとして活用しています。また、教室へ入っていけるようスモールステップでの指導を心掛けています。



## &lt; 中学入学後の小・中学校での情報交換 &gt;

P 中学校

[ねらい]

小・中引継会後も、必要に応じ小・中学校での情報交換をすることによって、生徒理解に努め個に応じた支援を行う。

[実施時期]

1 学期開始後、随時

[活動の流れ]

- 1 3月に小・中引継会を実施し、クラス編成や入学後の生徒指導に生かす。
- 2 新学期開始後、1学年部会を開き、さらに詳しい情報が必要な生徒がいるか話し合う。
- 3 詳しい情報が必要な生徒の出身小学校に、学年主任と生徒指導主事が出向き情報交換する。
- 4 得た情報を基に、個に応じた支援の在り方を検討し生徒指導に生かす。
- 5 その後も、必要に応じ情報交換し生徒指導に生かす。

年度末に小・中引継会を行い、その情報を基に、学級編成や新年度の指導に生かしています。しかし、いざ新学期が始まってみると、生徒によっては、小学校でのさらに詳しい情報を得たい場合があります。1学年部会で、そのことが話題となります。学年主任と生徒指導主事が小学校に出向き、さらに詳しい情報を入手し、その後の指導に生かしています。入学後も、小・中での情報交換をすることによって、より適切な個に応じた指導ができると思います。小・中が、柔軟に情報交換できる関係にあることが大切だと思います。



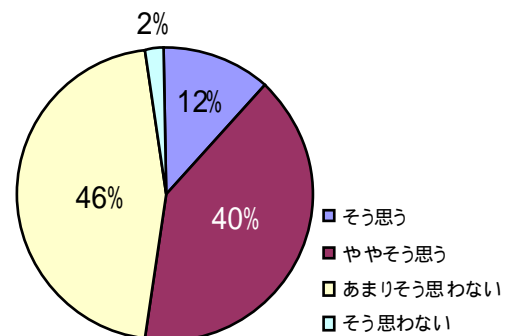
## 対策 3

中学校へのなだらかな移行

## [ 宮城の意識・実態調査より ]

Q. 小・中学校間での児童生徒理解の上に立った共通行動がうまく行われていると思いますか？

「そう思う」「ややそう思う」を含めて 52% となり、半数の教師は小・中学校間での児童生徒理解の上に立った共通行動がうまく行われていないと考えています。小・中引継会後も、必要に応じ小・中学校での情報交換をすることによって、小・中で一貫した指導をしていくことができると考えられます。



【小・中間での共通行動】(H18. 本研究調査)

## &lt; 交換授業・一部教科担任制のシステムの構築 &gt;

K 小学校

[ねらい]

焦点化した教材研究を行うことにより、質の高い授業を行い、児童の学力向上を目指す。また、交換授業や教科担任制を実施することによって、小・中の異なる学習指導体制をなだらかに移行させていく。

[実施時期]

通年（5・6年生対象）

[実際の取組内容] 6年生の例

- 1 交換授業 ... 国語と算数（担任同士）
- 2 教科専科 ... 社会（教務主任）、理科（副教務主任）、音楽（少人数担当・学年部）
- 3 重点教科 ... 算数
- 4 業間に週1回打合せを行い、週の反省、児童の情報交換、次週の予定を話し合う。
- 5 学習発表会、運動会等の特別時程の時は、時間割の調整をする。
- 6 家庭学習については、児童の加重負担とならぬよう教科間で調整をする。
- 7 家庭学習の手引きを作成し、保護者に家庭学習の習慣化の協力を呼び掛ける。

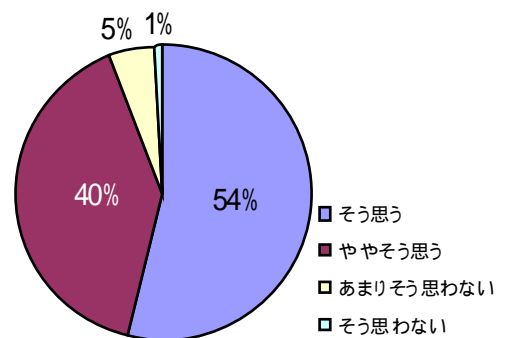
児童の意識調査では、「分かりやすい」「楽しく学習できるようになった」と回答している割合が高まっています。教師の意識調査では、「担当する教科についての教材研究が深まり専門性の高い授業を行うことができた」等の回答が挙げられ、質の高い授業の実現に近づきつつあると思います。また、複数の教師による多面的な児童理解や学級の児童から学年の児童という意識の変化が挙げられ、複数の教師で児童を育てていこうという教師の意識が高まっています。



## [ 宮城の意識・実態調査より ]

Q. 授業方法の改善、個別の指導など学習意欲を失わないような指導の工夫を行ってきたことが不登校の未然防止に効果的だったと思いますか？

「そう思う」「ややそう思う」を含めて 94%となり、多くの教師が授業方法の改善、個別の指導など学習意欲を失わないような指導の工夫を行ってきたことが不登校の未然防止に効果的だったと考えていることが分かりました。



【学習指導上の工夫】（H18・本研究調査）

対策3

中学校へのなだらかな移行

## &lt; 夏休み中学校体験入学 &gt;

N小学校

[ねらい]

来年度中学校に入学予定の小学6年生を対象に、体験入学を実施することを通して、中1ギャップの解消に努める。

[実施時期]

夏休み（8月初旬）

[活動の流れ]

- 1 つどい ... 開校式，学校紹介（生徒会執行部担当），交流活動（MAP）
- 2 朝の会 ... 仮担任，仮学級での一日の予定の確認
- 3 授業体験 ... 英語，数学，理科の授業を体験
- 4 給食 ... 全員での給食
- 5 交流活動 ... MAP（入学する3校の小学生同士）
- 6 部活動見学・体験 ... 興味のある部活動を見学・体験

体育館で開校式が行われ、生徒会役員が自作したスライドを見ながら、学校生活の大まかな様子をつかみ、その後、MAPでの楽しいゲーム的な活動を通して仲間づくりを行いました。その後、クラスごと仮の担任から一日の予定を聞き、英語・数学・理科の授業を体験しました。ランチルームで全員そろっての給食会を終え、午後には、MAP、部活動見学です。部活動を見学するだけでなく、一緒に参加し、先輩に指導してもらうことができましたようです。小規模校から進学してくる児童にとっても、大規模校から進学してくる児童にとっても、初めて出会う他の小学校の仲間と交流することができ、楽しい体験入学となったようです。



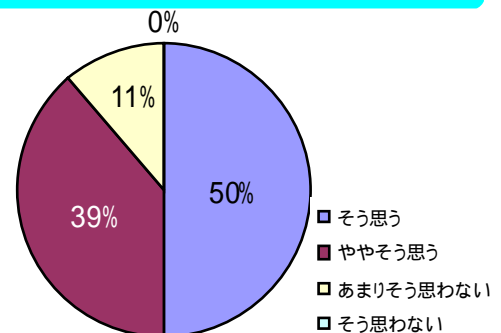
## 対策3

中学校へのなだらかな移行

## [ 宮城の意識・実態調査より ]

Q. 小学6年生が実際に中学校に行き、様子を見学したり、体験したりして中学校生活に対する不安や悩みを解消するための情報提供を行ってきたことが不登校の未然防止に効果的だったと思いますか？

「そう思う」「ややそう思う」を含めて89%となり、多くの教師が小学6年生の中学校生活の見学・体験が不登校の未然防止に効果的だったと考えていることが分かりました。



【小6の中学校見学・体験】（H18・本研究調査）

## &lt; 中学3年生による学校説明会・中学校授業体験 &gt;

M小学校

[ねらい]

出身小学校に中学生が出向き，中学校生活説明会を実施したり，中学校の教師が小学6年生に，授業を行ったりすることを通して，中1ギャップの解消に努める。

[実施時期]

中学校授業体験（2学期に2回実施），中学校説明会（11月末）

[活動内容]

- 1 卒業した先輩による中学校生活説明会の実施。
- 2 中学校教員が小学校に出向いての授業。また，6年生が中学校に出向いての授業体験。  
音楽，理科を実施
- 3 部活動見学の実施。
- 4 学年便りで，保護者への活動の紹介。

中1ギャップを少しでも解消するために，小・中が連携して取り組んでいます。学校説明会は，中学校が中心となり企画し，小学校を会場に実施しています。中学生が手作りの学校紹介のパンフレットを作成し，それを基に中学校生活について紹介します。小学生にとっては，卒業した先輩が説明してくれることで，親近感や安心感をもつようで好評です。

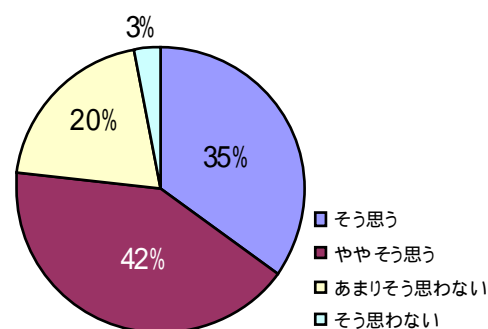
また，小学校を会場に中学校の先生に音楽の授業をしていただきました。児童からは，「中学校の先生にほめてもらってうれしかった」「緊張しないで歌えた」等の感想が挙げられ，その様子は，学校便りで保護者にも紹介しました。今後，6年生が中学校に出向き，中学校の理科の授業を体験する予定です。



## [ 宮城の意識・実態調査より ]

Q. 小学6年生に進学先の先輩（中学生）の話を聞く機会を与えてきたことが不登校の未然防止に効果的だったと思いますか？

「そう思う」「ややそう思う」を含めて77%となり，多くの教師が小学6年生に中学校生活をイメージさせる上で進学先の先輩（中学生）の話を聞く機会を与えてきたことが不登校の未然防止に効果的だったと考えていることが分かりました。



【先輩の話を聞く機会】（H18・本研究調査）

対策3

中学校へのなだらかな移行

## &lt; 小・中一貫した教育活動の展開・学力の向上 &gt;

○小・中学校

[ねらい]

小・中学校間の教員の交換授業，合同の校内研究や生徒指導体制と情報交換等を実施することにより，小・中学校の9ヵ年を通じて児童生徒を育てることを目指す。

[主な内容]

- 1 小・中校務調整会（校長・教頭・教務主任）を毎月実施し，日程を調整しながら合同の学校行事を実施する。  
小・中校務調整会 各小・中学校での運営委員会 各小・中学校での職員会議
- 2 中学校の「社会・数学・理科・英語・音楽」科の教員が小学校の授業を担当し，小学校教員が中学校の「保健体育」を担当する。
- 3 小・中合同の校内研究を通じて，9ヵ年の指導計画の検討や「個人学習カルテによる小・中間の学力面での引継ぎ」，「家庭の教育力向上を目指した啓発」等に共通で取り組む。
- 4 生徒指導面でも共通の体制を組織し，日常的に情報を交換する。

小・中併設校という点を最大限に生かすために，合同行事の実施だけでなく，校内研究や生徒指導面での小・中の連携を深めています。ゲストティーチャー（兼務教員）による授業は，中学入学に関する生徒の不安を少なくしています。中学校教員にとっては，小学生の学ぶ様子を初めて実感し，小学校教員にとっては，中学生になった教え子の成長した姿を見ることとなりました。9ヵ年のスパンで成長させることを踏まえ，互いにこれまでの授業の在り方を見直していく必要があることを感じています。



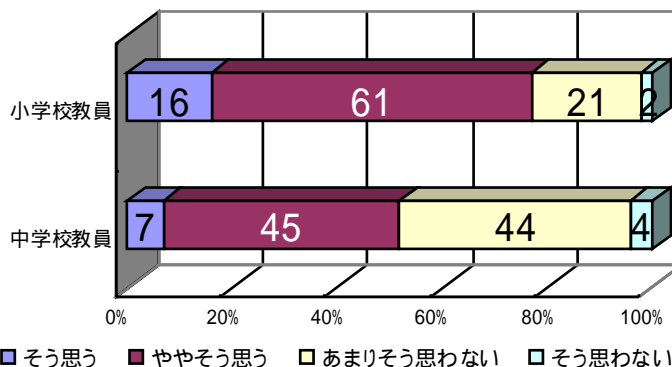
## [ 宮城の意識・実態調査より ]

対策3

中学校へのなだらかな移行

Q．小学校では，児童の進学に伴う環境の変化に対応する力を十分指導できていると思いますか？

小学校の教師は「そう思う」「ややそう思う」を含めて77%であるのに対して，中学校教師は52%となり，児童生徒の環境の変化に対応する力に関する教員のとらえ方に，小・中で差があることが分かりました。



【環境の変化に対応する力】（H18・本研究調査）

## &lt; 進学先の教師による英語の授業 &gt;

X 小学校

[ねらい]

中学校の教師による英語の授業を小学6年生に体験させることを通して、中学校から始まる英語学習への期待を膨らませたり、不安解消に努めたりする。

[実施時期]

3学期に1回実施      今後回数を増やしていきたい

[主な内容]

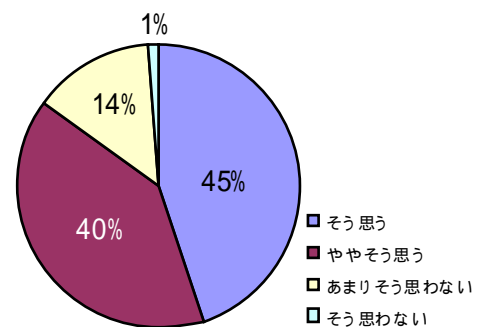
- 1 中学校の英語教師とALTが小学校に出向いての授業
- 2 中学校の学習スタイルでの実施
- 3 入学当初の学習内容を取り入れた授業
- 4 学校便りで、授業の様子を保護者に紹介

中学校に入って新しく学ぶことになる英語の授業について知りたいという6年生の希望に応え、進学先の中学校に英語の授業をお願いしました。本校の意向を快く受け入れていただき、中学校の先生とALTによる「英語の出前授業」が実現しました。中学校の授業スタイルで授業を行っていただきました。授業を体験した児童達は、英語学習への興味・関心と中学校入学への期待が高まったようです。このような授業を実施することができたのも、中学校の協力を得ることができたからです。今後も小・中が連携して、取り組める関係を大切にしていきたいと思います。



## [ 宮城の意識・実態調査より ]

Q. 小学6年生に進学先の授業見学の機会を与えてきたことが不登校の未然防止に効果的だったと思いますか？  
「そう思う」「ややそう思う」を含めて85%の教師が小学6年生に進学先の授業見学の機会を与えてきたことが不登校の未然防止に効果的だったと考えていることが分かりました。中学校から学び始める英語科の授業に関して見学したり体験したりすることで、英語学習に対する不安を少しでも解消し、興味・関心を高めることができると考えられます。

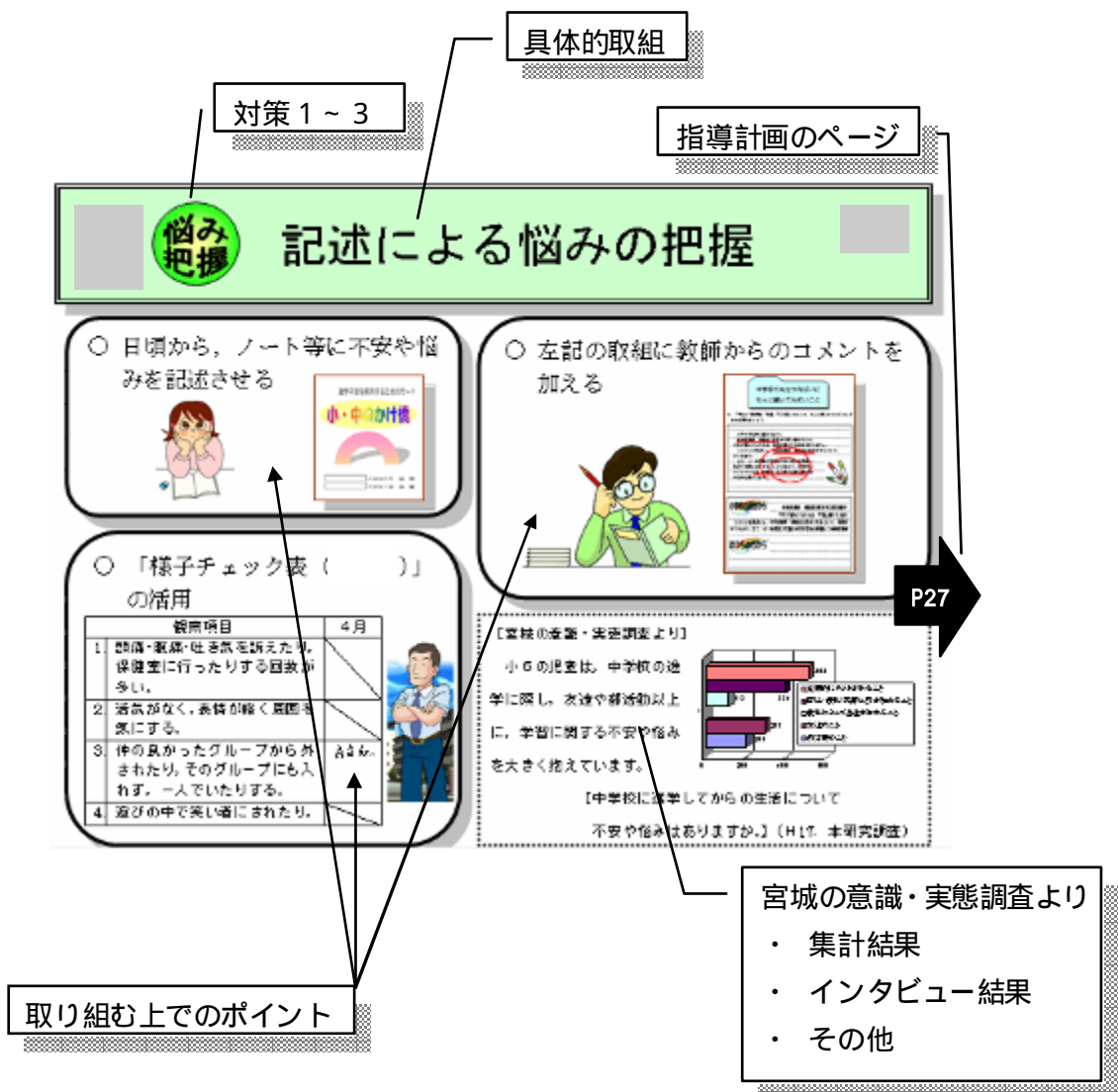


【進学先の授業見学の機会】

(H18. 本研究調査)

対策3

中学校へのなだらかな移行



**【取組のポイント ( P24 ~ P26 ) の見方】**